

テーマ「廣池千九郎が問うたもの」

創立者生誕 150 年にあたり、これまでの廣池千九郎研究の蓄積を踏まえた上で、同時代の人物との比較やその後の学問の発展など新しい視点による考察を交え、廣池の思想と業績についてより深く切り込んでいきます。

柏会場 発表者と発表要旨（平成 29 年 1 月 28 日～ 29 日） ※**青字**は各発表者のテーマです。

岡崎 匡史（モラロジー専攻塾 第 25 期生）

モラロジーにおける神のリアリティ

神を信仰することは、必ずしも宗教団体の専有ではない。宗教は「信仰本位」であり、モラロジーは「道徳本位」である。だが、「神」の存在を抜きにしてモラロジーは成立せず、最高道徳の実行をすることはできない。本発表では、廣池千九郎が「神」をいかにして説明したのか、そして、モラロジーと神の関係を探っていく。

矢野 篤（研究員）

廣池千九郎関係資料の由来と構造——廣池の資料認識と保存

本研究の目的は、現在廣池千九郎記念館で所蔵している、「廣池千九郎関係資料」が形成されるまでの過程を明らかにし、その全体像を把握することにある。今回はその中でも特に記録史料（アーカイブズ）に注目し、廣池がそれらをどのように認識し、どのような意図で遺したかを検証する。

江島 顕一（研究員）

廣池千九郎と日本教育史学——佐藤誠実『日本教育史』の修訂をめぐる

本発表は、1903（明治 36）年に刊行された佐藤誠実編纂『修訂日本教育史』（上・下）の「修訂」を廣池が行ったのではないかと仮説の論証を試みようとするものである。『古事類苑』をめぐる廣池の佐藤との関係、日本教育史学における『日本教育史』の位置についても検討し、廣池と日本教育史学のつながりを考察する。

水野 修次郎（客員教授）

進化論と道徳心理学の出会い——21 世紀の道徳科学

21 世紀になると突然に新しい学問、道徳科学としての道徳心理学が発展する。進化論に基礎のある直観的道徳、嫌悪感、信頼感などの研究が注目されている。共感脳の研究も進歩している。21 世紀は、道徳を科学的に研究できる時代になると予言できる。

梅田 徹（教授）

新たな経済主体モデルとして「ホモ・ソシオエコノミクス」を導入する意義——経済と道徳を接続する一つの試み

主流派経済学の理論は、自己利益だけを追求する利己的な人間を前提にしている。一方、現実の人間は利他的にも行動することが実験経済学等の研究で示されている。利他的にも行動する人間モデルを前提に経済にアプローチするとどうなるだろうか。経済と道徳がどのように関連しているかの理解が深まるはずである。道経一体思想の理解にも不可欠な手続であると考え。

徳永 澄憲（客員研究員）

廣池千九郎と子爵齋藤實の交流——廣池の社会的実践の事例として

廣池博士と齋藤子爵とは、大正 11 年から齋藤が 2・26 事件で凶弾に倒れる昭和 11 年まで長期に渡り交流があった。齋藤子爵は軍部を抑えることができる大人格者であり、国家の危機を救うにあたり、「自力更生」を唱道し廣池と相通じる共通認識があったゆえに、博士はこの昭和初期の日本の難局の打破を齋藤子爵に託したと拝察できる。

小山 高正（主任研究員）

家系を継ぐということ——生命科学・進化人類学の視点から

廣池博士は、万世一系の意味として、①人間の血統の連綿として続くこと、②血統は絶えても、その家名は永遠に続くこと、③血統・家名は永遠に続くこと、をあげている。家系を継ぐということが、生命の連続性を研究する生命科学もしくは進化人類学の視点からどのようなことを意味するのかについて考察したい。

立木 教夫（客員教授）

廣池千九郎の遺伝学的研究再考

廣池千九郎博士は、『道徳科学の論文』の第 3 章第 6 項で「遺伝」を取り上げている。『論文』は 1920 年代の遺伝学をもとに執筆されており、今日、この部分を理解するには科学史的視点が必要となる。科学史的知識を補充して廣池の議論を理解し、そこに込められたメッセージを読み解いてみたいと考えている。



講演 北川 治男（モラロジー研究所 副理事長）

演題 「廣池千九郎が問うたもの」

大阪会場 発表者と発表要旨（平成 29 年 2 月 19 日）

久禮 亘雄（研究員）

廣池博士の『東洋法制史本論』の特色と学説史上の意義——家族制度論を中心として

廣池博士の『東洋法制史本論』における家族制度論について、特に日本的な家族のあり方についての議論を中心に検討する。更に、廣池博士の師である穂積陳重、博士と書簡のやり取りがあった法制史家の中田薫の研究との比較を行うことで、「歴史学者・廣池千九郎」の特色とその学説の意義を明らかにしたい。

橋本 富太郎（研究員）

日本の道徳系統と国家伝統

廣池千九郎は『道徳科学の論文』において日本皇室を、「道徳系統」と「国家伝統」の二つの概念から論じている。それによって日本皇室は、世界における道徳的指標として、また日本国民の恩人の系列として位置づけられた。本発表では、これらの形成過程を概観し、その内容を検討することにより、改めて現代的な意味を問う。

宮下 和大（主任研究員）

知徳一体論

『道徳科学の論文』第五章に述べられた「知徳一体」論は、晩年の「廣池千九郎が問うたもの」の一つに数えられるだけでなく、現在においても麗澤教育を代表する理念として継承されている重要な言葉でもある。本発表では廣池千九郎における知徳一体論の形成と展開の過程を踏まえて、その意義を再考察したい。

宗 中正（主任研究員）

人間の尊重について

人間の尊重は、当然のことでありながら、一般に必ずしも守られておらず、悩みや苦しみ、争いの原因になっている。廣池千九郎は「人間を尊重してこれを愛すること」が慈悲にあたり、事業の完成や自己の幸福に最も必要であると考えた。人間の尊重への理解を深めることは、道徳実行の標準を高める重要な要素である。

大野 正英（センター長・教授）

渋沢栄一と廣池千九郎の「道徳経済思想」の比較研究

日本の近代化に大きな功績のあった実業人の渋沢栄一と廣池千九郎は、ともに道徳と経済は一体のものであるとした思想を唱えたが、それは近代化の中で日本社会のあり方についての共有された問題意識に基づくものであった。両者の間の交流を明らかにするとともに、その思想の比較を通じてその共通点と相違点を見ていく。



講演 所 功（研究主幹・教授）

演題 「万世一系の現代的意義」